

# TIJ 日本語教育研究会通信

No.65 2018.10.12 発行

発行：T I J 日本語教育研究会事務局

東京都葛飾区新小岩 1 - 1 7 - 1 0

Tel:03(5607)4100 / Fax:03(5607)4102

E-mail [tij@tij.ne.jp](mailto:tij@tij.ne.jp)

TIJ ホームページ <http://www.tij.ne.jp>



猛暑の夏がやっと終わり、過ごしやすい季節になりました。皆様いかがお過ごしですか。今年の夏は、7月に西日本豪雨、9月に台風21号と直後の北海道胆振東部地震、その後の台風24号の日本列島縦断と、次々と災害に見舞われました。被災した皆様には心からお見舞いを申し上げます。

今年の夏も、日本語振興協会主催日本語学校教育研究大会が開かれ、T I Jからも10数名が参加しました。今年3月に文化庁によってとりまとめられた報告書「日本語教育人材の養成・研修の在り方」を巡って、今後の日本語教育現場を考えることが大きいテーマとして取り上げられました。今号に研究大会のご報告を掲載しました。

T I J内では、T I J著作の「はじめよう日本語初級」の勉強会を開きました。日本語教師経験の比較的短い方々に、勉強会で気づいたこと、学んだこと書いてもらいました。またT I Jで実習体験をした方と、大学生の教育実習のレポートも掲載しました。

## 【本号の内容】

1. 日振協主催日本語学校教育研究大会報告
2. 「はじめよう日本語初級」勉強会レポート
3. 日本語教育実習体験コース研修レポート
4. 教育実習レポート

# 日振協主催平成 30 年度日本語学校教育研究大会報告

## 1 日目パネルセッション要旨

テーマ：文化庁「日本語教育人材の養成・研修のあり方」を知って現場に活かす

市川さゆり (TIJ)

文化庁の今年 3 月に発表された「日本語教育人材の養成・研修のあり方」は平成 12 年の『日本語教育のための教員養成について』を 18 年ぶりに改定したものである。今回の発表の主な点は以下の通り。

### 1. 日本語教育人材について

#### (1) 役割

- ① 日本語教師：日本語学習者に直接日本語を指導する者
- ② 日本語教育コーディネーター：日本語教育プログラムの策定、教室運営・改善、日本語教師に対する指導・助言を行うほか、多様な機関との連携・協力を行う者

#### (2) 段階

##### 【日本語教師】

- ① 養成：日本語教師を目指す者
- ② 初任：日本語教師養成段階を修了した者で、それぞれの活動分野に新たに携わる者
- ③ 中堅：日本語教師として、初級から上級までの技能別指導を含む十分な経験を有する者（2400 単位時間以上）

##### 【日本語教育コーディネーター】

日本語教師③の中堅を経たもので、告示校で常勤経験 3 年以上を有し、教育課程の編成や他の教員の指導を担う主任教員

**特徴：**養成段階だけでなく、初任者、中堅など段階ごとに必要な能力が示されている。また、初任は対象を①生活者としての外国人②留学生③児童生徒等に区分し、それぞれの活動分野で必要とされる能力が明確に示されている。

**課題：**私たちは活動分野②の留学生であるが、課題は以下の通りである。

- ・民間の養成・研修を経た人材が日本語教師になるが、留学生対象に特化された養成・研修とは言えない。
- ・教育内容が養成機関の自主性に任されており、養成される人材の資質・能力にばらつきがある。
- ・教育実習については初級レベルのみならず、中級・上級レベルの指導法や技能別指導方法も習得させることが求められる。
- ・養成段階と教師となってから習得すべき内容とに分けて考えることが必要だが、現在

は各日本語教育機関で十分な研修機会が確保されていない。

- ・主任教員の研修について、その研修は日振協が行っているのみで、研修機会が限られている。

## 2. 基本的資質について

(1) 日本語教育人材に共通して求められる基本的な資質・能力

- ①日本語を正確に理解し、的確に運用できる能力を持っていること。
- ②多様な言語・文化・社会的背景を持つ学習者と接する上で、文化的多様性を理解し尊重する態度を持っていること。
- ③コミュニケーションを通じてコミュニケーションを学ぶという日本語教育の特性を理解していること。

(2) 専門家としての日本語教師に求められる資質・能力

- ①言語教育者として必要とされる学習者に対する実践的なコミュニケーション能力を有していること。
- ②日本語だけでなく多様な言語や文化に対して深い関心と鋭い感覚を有していること。
- ③国際的な活動を行う教育者として、グローバルな視野を持ち、豊かな教養と人間性を備えていること。
- ④日本語教育に関する専門性とその社会的意義についての自覚と情熱を有し、常に学び続ける態度を有していること。
- ⑤日本語教育を通じた人間の成長と発達に対する深い理解と関心を有していること。

### 特徴：

- ・まず(1)があり、その下に(2)が記述されていること。
- ・前回はやや知識偏重の傾向があったが、今回は求められる資質・能力が①知識②技能③態度の3つに明確に分類されていること。
- ・現職者に対する研修の言及があること。①教育という仕事の特性②成人と学び③段階性④現実の問題への対処の重要性をふまえ、新しい試みを経て成長していくというプロセスを示していること。
- ・教育内容の重み付けと実践力への言及があること。①教育実習の必要性の明確化、養成段階においては日本語教育検定試験合格者も教育実習を行うことが望ましいと明記②(2)で全体のバランスの重視③養成段階で「必須の教育内容」の明示④留学生等対象別に重視すべき内容の違いを持たせたこと

## 3. 今後に向けて

日振協も日本語教育人材研修モデルプログラム・カリキュラムの作成等文化庁の支援事業を行うことになっているが、関係者は今後当事者としてどこまで改善に関わるか、関わろうとするかその覚悟が問われている。

疑問点：どの学校でも教師の「質と量の確保」が課題である今、次のような疑問が出た。

(1) 現職者研修の実施について

- ・いつ、だれが、どのように行うか。・・・研修する講師の育成が課題である。  
文化庁の報告には初任に対しては当該教育現場における OJT や大学等の教育研修機関において、中堅、主任教員に対しては大学等の教育・研修機関においてと書かれている。
- ・そのコストはだれが負担するか。  
研修期間中の給与はどうするか、研修費はだれが負担するか。
- ・必須か、資格化するか。

(2) 評価について

- ・受講者の評価をどうするか。どう測るか、その評価をどう使うか。
- ・研修自体の評価をどうするか。成果をどう捉えるか。量か、質か。

分科会Ⅱ「新しい教師研修のあり方を考える2-教師 Can-do の活用と自己研鑽-」

佐々木真佐子 (TIJ)

昨年に引き続き、分科会「教師研修のあり方を考える-教師 Can-do の活用と自己研鑽-」に参加いたしましたので、ご報告いたします。

1. 前回の分科会についての報告

- ・教師研修事例：青山国際教育学院における新人研修
- ・ワークショップ：日本語教師のライフステージに応じた Can-do リスト作成  
前回のワークショップでは、日本語教師のキャリアを4段階に分け(①2年以内の初任教师②3年程度の新任教师③7年ほど経過した中堅教師④10年以上のベテラン教師)、また、それぞれの段階で求められる教師の資質・能力を4つのカテゴリー(①専門性②社会力③自己教育力④教育的人間力)に分けて「～できる」の形でグループごとにリストアップし、全体で共有した。

2. 本分科会でのワークショップ

平成30年3月に文化庁から出された「日本語教育人材の養成・研修の在り方についての報告案」\*により教員養成の基本的指針が新たに示されたが、今回はその指針に紐付けて日本語教師に求められる資質・能力を考えるというものであった。(前回のワークショップでリストアップしたものを文化庁の報告案に合わせて色分けしたリストも配られた。) 今回のワークショップ「教師 Can-do リスト作成」は以下のように行われた。

\* ([http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/pdf/r1399774\\_01.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/pdf/r1399774_01.pdf))

(1)目的

①参加者が自身のキャリアプラン、目指す教師像について考え、自身の役割と責任を自覚する。

②各段階（キャリア）での問題点や課題に気づき、解決方法となる研修の在り方について模索する。校内研修について考えるきっかけとなる。

## (2)Can-do リストの作成方法

①文化庁からの報告案の活動分野は3分野に分かれているが、「留学生に対する日本語教育人材」に絞る。

②キャリアは文化庁の報告案に合わせて4段階（養成→初任→中堅→主任教員）に分ける。（報告案\*の16、18、20、21ページご参照）※報告案での「養成」とは日本語教師を目指し養成課程などで学ぶ者、「初任」は0～3年程度の日本語教育歴がある者、「中堅」は2400単位時間以上の経験があり、初級～上級レベルが教えらえる者ということである。

③報告案では教師に求められる資質・能力が大きく3つ（知識「…知識を持っている」・技能「～できる」・態度「～ようとする」）に分かれており、その内容をもとに、②のキャリアごとに「～できる」という形で具体的な教師 Can-do を考えていく。また、不足している点（報告案には触れられていないが、現場では必要な力）、気づき・疑問点（現場と指針のずれ、どんな研修機会が必要かなど）」についても考える。

今回 TIJ から参加した講師の殆どが主任教員について考えるグループだったので、そのグループでリストアップしたものを例として挙げてみる。

### ○主任

#### 〈Can-do 項目〉

留学生受け入れの最新の動向に応じてどんな国からどんな学生を受け入れるか等の方針を立てることができる。

対象学生に応じた適切な教育方法を考えることができる。現場の教師に教育方法を指導することができる。

状況に応じた組織編成ができる。組織に応じた人員を配置することができる。

教育方針に合った人材を採用できる。キャリアに応じた研修を考えることができる。

危機管理マニュアルが策定できる。そのマニュアルについて教師に指導できる。

学校のフィロソフィーを学校全体に浸透できる。

問題が起きた場合速やかに調整できる。

#### 〈不足している点〉

講師の精神面のケア・サポート、学校全体の雰囲気作り・フィロソフィーについてはっきり書かれていない。

#### 〈気づき・疑問点〉

留学生施策など行政面の研修も必要である。

経営者と主任の役割が具体的に書かれていないので、分かりにくい。

他のグループ（各段階での Can-do 項目、不足している点、気づき・疑問点について

て)は以下のようなものを挙げていた。(※Can-do に関しては数が多いので、4例ずつ挙げておく)

#### ○養成

〈Can-do〉教材分析ができる。やさしい日本語への言い換えができる。基本的な日本文化を発信できる。自分らしい教師像が思い描ける。

〈不足〉人間力が不足している。板書についての記載がない。

〈気づき・疑問〉日本語教師にはバランス感覚が必要である。教師全員が同じ立場で話し合える研修会があると良い。養成で知識を得ても実践を経なければ理解できない項目が多い。知識に偏っているのではないか？鋭い言語感覚とは具体的に何か？

#### ○初任

〈Can-do〉クラスの実情に合わせた授業ができる。進学のためのスケジュールを把握し学生に提示できる。ICTを使った授業展開ができる。テストの分析・問題発見能力を身につけることができる。

〈気づき・疑問〉自分の立ち位置を理解し、足りない部分を補ってあげたい。報告書は1つ1つがざっくりしていて具体的ではないので、それぞれ現場での落とし込みが必要。

年数でキャリアを分けてよいのか？学校の自由度がなくなるのではないか？ちょっと求めすぎではないか？

#### ○中堅

〈Can-do〉プログラムの全体像の把握ができる。現行のプログラムを見直すことができる。初任に助言ができる。進学先とのパイプ役となり情報を得ることができる。

〈不足〉ICT教育に関する項目が不足している。進路指導は初任ではなく中堅がやることではないか？

〈疑問〉どこまでが中堅に求められる能力か？日本語学校からみると主任がやるが多く入っている。中長期的な指導計画とは何を指すのか？

#### ○主任

〈Can-do〉教師の意見を反映することができる。後進の育成ができる。学校の諸業務・進行・状況を情報化できる。校外の団体とのコネクションを持つことができる。

〈疑問〉読み手によって受け取り方が変わってしまう。内容が重なる項目がある。

### 3. まとめ

上記で挙げた通り、文化庁の指針で示された段階ごとの資質・能力と現場で求められるものとのズレが指摘された。特に養成の段階で身に付けることが期待されているものの中には、実際に現場で教えてみないと分からないものが含まれている。また、初任の内容についても知識は必要だとしても実際に行うのは中堅以上だと思われるものがあつた。最後のまとめとして、発表者から「日本語教育推進法（仮称）の法案化が進みつつある中、社会貢献としての日本語教育という点からも、日本語教師に求められるものが大きくなる。個々の教師の能力を上げつつ、学校がチームとして協力し合いに自校の教育を作り上げていくかについて突き詰めて考える必要がある」といっ

たお話があった。

感想：この分科会に参加して、日本語教師に求められる資質・能力が幅広い範囲に及ぶということ、日本語教育に関連する周辺知識や技能がますます必要となっていることを再認識した。現在、本校の「教師に必要な能力リスト」に項目を追加しているところだが、文化庁の報告案、分科会での発表をもとに、本校での課題を考えつつ、まず叩き台を作ってみたい。今回のワークショップでは「主任教員」の段階の Can-do について考えたが、TIJ においてもそれぞれの教師が自分の属する段階について考える機会が設けられたら良いと思った。

## 分科会V「デジタル時代の教師の学習支援のあり方」

増田 寿枝 (TIJ)

8日の分科会「デジタル時代の教師の学習支援のあり方」に参加しましたので、ご報告いたします。

この分科会では、まず学習者が使っているツール、教師が知っているツールのアンケート結果を見て、学習者の学習方法がどのように変化しているのかということを知り、その上で今後、教師側がどのように学習支援をしていくべきかについてグループごとで話し合った。

### 1、学習者の学習ツール使用状況

#### 【学習者が実際に使っている学習ツール(日本語学校)】

・ Mazil, Jdict (ベトナム) ・ 沔江日語 (中国) ・ Naver (韓国) ・ Google translate ・ JLPT 対策関連のもの ・ Weblio ・ Youtube、ヤフーなど

#### 【学習者が知っている学習ツール(認知度%)】

NHK NEWS WEB EASY(23%)、Quizlet(18%)、Imiwa? , Lang-8(14%)、Kanji alive!(13%)、Anki(11%)、JPLANG, エリンが挑戦!(10%)、Reading Tutor, ひらのひらがなめがね, Rikai.com, MARUGOTO Plus(8%)、OJAD(7%)

#### 【学習者が実際に使っている学習ツール(大学)】

<アプリ> 延べ約 280、約 90 種

・ imiwa?, Japanese, Google translate, Takoboto, Anki, Akebi, JED-Japanese Dictionary, Jsho-Japanese, Shirabe Jisho, Obenkyo など

<ウェブサイト> 延べ約 200、約 50 種

・ Google Translate, Jisho, Weblio, Google, JPLANG, Youtube, ヤフー, NHK NEWS WEB, The Ultra Handy, Japanese Verb Conjugator, NAVER, 和独辞典 など

【ツールの使用に関して学習者がどんなことに困っていると思うか】

- ・携帯電話を禁止している学校の場合は授業中に使えない。
- ・インターネット環境がないと使えないものもある。
- ・マイノリティ言語だとツールがない、または少ない。
- ・意味は調べられても使い方まではわからない。
- ・アプリを使うとアプリの進捗と授業進捗にズレが生じる。
- ・信頼できるアプリかどうか不明。有効なアプリかどうかを選別する必要がある。
- ・とにかくこれをやれという指導ではなく、いくつかの学習方法を提案して欲しい。

## 2、教師のツール使用状況

【教師の学習ツール認知度(認知度%)】

エリンが挑戦！(66%)、Reading Tutor(37%)、Quizlet(24%)、MARUGOTO Plus(19%)、Imiwa?、Anki(11%)、ひらひらのひらがなめがね(10%)、Kanji alive!(9%)、Lang-8(5%)、OJAD(4%)、Rikai.com(3%)、JPLANG(1%)

## 3、教師の学習支援

【学習に関してこれまで学習者にどんなアドバイスをしてきたか】

- ・動画を見る機会を増やす。テレビを買うように促す。(好きな俳優を見つけて、その人が出ているドラマを全シリーズ見るなど)
- ・同国人が多いアルバイト先の場合は、バイト先を変えて日本語を話す機会を増やすよう促す。
- ・ポッドキャストを聞かせる。
- ・漫画やアニメが好き人は漫画を日本語版で読ませる。
- ・初級のうちはホワイトボードに書ける毛筆を使って漢字の指導を行う。
- ・CDを聞く環境がない学生には音声データをLINEで送って練習させる(著作権の問題もある)。
- ・漢字が覚えられない人はすべて覚えようとしないで文の中で意味を理解できればいいと伝える。
- ・大学や大学院を目指している学生にはCinii(論文が読めるサイト)を勧める。

## 4、今後の教師のあり方

【日本語教育のICT化、デジタル化が進む中、どんな不安や問題を感じるか】

- ・機械操作が得意な人とそうでない人がいる。また、機械操作の研修などが必要になる。
- ・設備投資をしてくれる学校とそうでない学校がある。
- ・それが有効かどうかはわからないまま使う恐れがある。流行のものに流されてしまわないか。
- ・使用したものの効果をどう示せばいいかわからない。また、効果があるかわからないものはどこに聞けばいいかわからない。



→例えば、教授法を学びたい大学生にアナログの授業を見せて、この授業を若い世代の大学生ならデジタル機器を使ってどのように教えるか考えてもらう。お互いメリットがあるのではないか。

- ・デジタルですべて授業ができてしまったら、教師の存在意義がなくなるのではないか。
- ・すべて機械でできる時代になったら、実生活で日本語を使う機会が減る。
- ・自分の関心のあるものにしかアクセスしなくなるので、情報や知識が偏る可能性がある。
- ・アプリなどのゲームは上手になっても、それが実際に日本語力に直結しているのか疑問。
- ・著作権の侵害にはならないか気をつけなければならない。
- ・デジタル化が進む中で人との融合をどう図るか、教室で行う授業の意味があるかどうか。

→何らかの事情があって学校に来られない学生にとっては、学ぶチャンスが増える。

- ・今までの ICT を使わない授業の良さは置き去りにされてしまわないか。

#### 【今後、教師として取り入れてみたいこと】

- ・出欠管理
- ・ツールを使って日本に来る前に文字を覚えてきてもらう。
- ・テーマに対する意識調査をして討論。
- ・リアルタイムアンケート。その場でアンケート結果を出し、グラフなどで見せる。
- ・調べ学習。パワーポイントを使って発表まで行う。
- ・パワーポイント、グーグル、e-ラーニング教材など、できるところから少しずつ進めていく。

#### 5、まとめ

今回の分科会で、時代の変化とともに学生の学習方法・日本語教育も変わってきているということがわかった。学生が使っているツールも紙辞書→電子辞書→スマホとわずかこの10年でもかなり変わってきている。日本語教育もその変化に合わせて少しずつ変えて行かなければならないと感じた。新しいものを取り入れていくことに不安を感じる部分も多いが、まずはできるところから始め、教師同士で情報共有しながら少しずつでも進めて行くことが大切だと思った。

#### 自由研究発表-3

#### 研究発表の授業における認知プロセスの外化 上級のアクティブラーニングを考える

水口幸子 (TIJ)

日本語学校教育研究大会の自由研究発表、黒崎亜美・黒崎誠（ラボ日本語教育研修所）両先生のご報告です。

## <研究概要>

上級の学習者を対象としたアクティブラーニングを取り入れた実践授業の報告であり、「アクティブラーニングは、実際には、文字通りのアクティブなラーニングを意味するものではない。」という観点から、アクティブラーニングについての正しい認識を得るために「認知プロセスの外化」をキーワードに発表が進められた。では実際にアクティブラーニングとはどのような学びのスタイルなのか？発表者の黒崎氏は過去の論文からの先行研究において「物事を認知する過程で自らが認識したことを他者に話したり、書いたり、発表したりすることでより深く、正確に認知することを指している。」とした。

## <授業におけるアクティブラーニングの実践>

### ●研究発表概要

2018年冬学期(1～3月)、学習時間 1200 時間以上の上級後期クラス(11名：ベトナム人男性 2 女性 2・中国人男性 1 女性 4・韓国女性 2)、90分授業を全8回で、「研究発表」の準備をし、研究発表大会を実施。「研究発表」とは、黒崎氏の研修所で2008年から上級の終了学期に実施されてきたもので、インターネットの検索方法、ネット上の文章引用する方法など(コピーアンドペーストをしない引用方法等)を教授後、学習者自らで興味のあるテーマを決め、5週間の準備後、発表するというもので、今年度は他者との対話を通して準備を進めさせ、コンピテンシー(能力・資格・適正の意)の育成の観点から、これらの研究発表についての授業を再構築したということであった。

	授業内容	評価
第1回	ネットの情報検索の方法	
第2回	検索した文章の利用方法	評価対象
第3回	テーマを決める	
第4回	アウトラインを決める	
第5回	中間発表	評価対象
第6回	準備	
第7回	準備	
第8回	準備	
研究発表大会		評価対象

その際、具体的には、学生に明示していた目標を従来の「収集したデータを自分の言葉でまとめることができる」「発表を効率的にサポートできる視覚資料を作成できる」に加え「学生同士のインターアクションがスムーズにできるようになる」「自分の言語行動を振り返ることができる」の2点をプラスしたとのことである。また学習者への課題設定としては「自分が持っている知識、調べた知識・確実なデータ、自分と他者への印象・感想、特徴分析が含まれたプレゼンテーションを行う」ということを明示したとの

ことであった。

### ●評価概要

第2回の評価…調べた内容をまとめたものを「書く」を評価

第5回の評価…自分の発表テーマ、流れ、今後の作業予定などを他の学習者の前で「話す」を評価。

研究発表大会の評価…評価表（話題・内容・構成・ジェスチャー・視覚資料・質疑応答）を使い評価。

今年度からの評価の取り組み…「他社との対話」に重点をおき、第3回～8回までは「教師との対話」として教師と話し合いを持つ。「自己との対話」では、「振り返りシート」というものを用いて自らの言語行動を文字化させた。「学習者同士の対話」としては、中間発表と研究発表大会で、学習者が他の学習者を評価したり意見交換する場を設ける。（同じクラスではない言わば関係のない学習者から当該学習者への意見やアドバイスという想定外の対話も生まれたとのことであった。）

### <授業の考察>

#### ●アクティブラーニング活動経験者の考察

結果的には、研究発表の内容がアクティブラーニングの活動を行ったことで従来のものより素晴らしいものになったとは言えないとのことだ。しかしアクティブラーニング活動経験者がこれまでの学習者と最も大きく異なった点は、**授業内で人の話を聞く姿勢が**できていることで、**他の学習者の研究発表を聞くだけではなく、他の学習者と教師が話している内容にも興味を持ち、それを自分の研究発表の準備に活かそうとする姿勢が見られた。**とのことであった。

#### ●「教師との対話」に関する考察

第6回～8回の準備時、授業時間の最後に学習者と教師の面談の時間を設け、「今日は何ができたか」「これから何をしなければならないか」「どんなことを研究発表の中に取り入れたいのか」を**学習者自身の言葉で言語化するように質問を投げかける。**（それを「振り返りシート」なるものに記入させる。）最初は**教師に教えてもらおうという姿勢だった学習者が、徐々に「報告+相談」というスタイルに変わっていく。**また面談を同じ教室の隅で行っていたことが功を奏して、当該学習者ではない他の学習者が、途中で助け舟を出す、アドバイスをする、自分が持っている情報を提供するなどの**協働姿勢が多く見られた**ようだ。

※振り返りシートについて…第6回～8回の最後に「振り返りシート」に書き込み提出する。「今日できたこと」「今後調査・記述が必要なこと」「どんな研究発表にしたいか」を考え、文章あるいは箇条書きで言語化させる。（面談後に書かせるものなので、面談時よりも詳しくなっている場合が多かったとのことである。また、面談時にうまく表現できなかったことを、どのように表現すればよいのかこのシートを使って質問してきた

ものもいたそうである。)

### ●研究発表会についての考察

当日参加者は9名。発表後に教師との質疑応答を行ったが、自然な形で聴衆である学習者からも質問が出て、活発な活動が行われたということである。聴衆である学習者からの評価は、内容について、形式について、視覚資料について、の項目評価と記述式のコメントを書かせた。(記述式のコメントには多くの質問や意見が記入されていたそう。)

テーマ	国籍	視覚資料
口紅について	中国人女性	PPT
ベトナム女兒殺人事件 その後	ベトナム人男性	PPT
日本の鉄道 車窓の魅力	中国人女性	PPT
バインチュンについて	ベトナム人女性	レジュメ
ミニマリズムについて	韓国人女性	レジュメ
シルクロード 歴史とその魅力	中国人女性	PPT
アオザイの歴史について	ベトナム人女性	PPT
電子マネーのこれからについて	中国人男性	PPT
一蘭の魅力について	ベトナム人男性	レジュメ

#### <授業を終えての考察>

アクティブラーニングを取り入れることで学習者の学び方が、教師からのアドバイスを待ちそれを取り入れるだけでなく、積極的に他者と係って自身の課題を見出す姿勢が見られるようになったそうである。アクティブラーニングとは学習者の学び方に焦点を置いた考え方で学習者にどのような授業を提供するのか、その組み立て、さらに学習者にどのように働きかけるかが大きな意味を持つものである。また教師には従来の授業形態にとらわれない柔軟な対応が求められる。「参加・対話型教育」では教師の役割は「教授者」ではなく「情報提供者」「共同学習者」「メンター（優れた助言師）」となるものであると結論付けている。

#### <研究発表を聞いての感想>

日本語教師を目指し勉強している時に、「アクティブラーニングとは学習者が受動的になってしまう学びではなく、能動的に学ぶことのできる学習法である。」という漠然とした知識はあったものの、実際、日本語教師として教壇に立つようになってからは、日々その実践の難しさを痛感している。あらゆる場面で、出来る限り学習者に考えさせて発

言させたく、質問を多く投げかけてはいるが、答えるまでに時間が掛かりすぎると感じてしまった時など思わず自分の考えを口走ってしまい、結果、学習者が「私の意見もそれです。」となってしまうたり、いつも特定の学習者が答えてしまうため、その他の学習者は他人事として処理している様子だったり、また自らが受動的な学びのスタイルの中で育ってきたため、学習者が自ら考えて学習を進められるよううまくお膳立て出来ないもどかしさも感じていた。挑戦→失敗→改良→失敗→改良という最中にいる自分にとっては、改良のヒントになる気づきが多く大変参考になる有意義な機会であった。研究発表の中で黒崎亜美氏がおっしゃっていた言葉で最も印象に残ったことが「もともと他人のアドバイスや意見を、性格・性質が原因でうまく取り入れられない学習者にも、それが容易にできる学習者が、教師（「情報提供者」「共同学習者」「メンター（優れた助言師）と共に学ぶことにより、また飛躍的に伸びていく姿を身近に見せ感じさせることで、少しではあるがよい影響を与えることもできる。」という旨の話だ。自ら学ぶ力のある学習者は教師からの働きかけが小さくともその芯の部分をつまみ何倍にもして学ぶことができるが、それと真逆の学習者に接するときは、どこからアプローチしようか途方に暮れることが多い。自ら学ぶ力のある学習者と教師が共に学ぶ姿を見せることで、いわゆる頑固な学習者に何かしらの働きかけができる可能性を感じ、アクティブラーニングの実践に挑戦し続けようと思いを新たにした。

## 自由研究発表 5

### 「社会的な運用能力を育てる『トピック発表』教授法」のご報告

北内直子 (TIJ)

日本語学校教育研究大会で行われた自由研究発表、平岡佳梨加先生 (ATOWA) 他のご報告です。

表題の研究発表の副題は「就職を目的とする中級学習者の就職準備に効果的な教授法の提案」となっており、日本語学校からの就職を目指す学習者の増加をベースに考えられた手法だと思われます。現在 TIJ で就職プログラムを担当していますので、非常に興味を惹かれる内容でした。発表の概要を報告した後に、所感を述べます。

#### 【発表概要】

##### 1. 「トピック発表」の背景と目的

「トピック発表」は日本語学校在籍中の非漢字圏大卒の企業内定者に向けて行われ、ヒューマンスキルや言語能力向上に効果があったとされる教授法である。企業が学習者に求めることは、組織人としての心構えや言葉の運用能力であり、それらを獲得するための目的と手段を体系的にまとめた表が提示された。表は社会人として日本社会に適応でき、最終的に自己実現ができるようになるまでを段階的に示している。

第1段階：事前にまとめたものを人前で発表すること

第2段階：伝わるように話し方を変え、臨機応変に質疑応答すること

企業面接に合格し内定獲得

第3段階：日本社会に適応すること

最終段階：自己実現

## 2. 授業デザイン

### (1) 第1段階のトピック発表

目的：興味があるトピックを調べてまとめ人前で発表すること。

実施頻度：日替わりで毎日。全員が発表。

所要時間：15分（発表1分、質疑応答10分、教師コメント2分）。

実施要領：以下のようにスタイルを決める。（後述の第2段階も同様）

発表者は社会人にふさわしい態度と言葉で発表する。質疑応答する。

聞き手はメモを取り、質問し、発表者をたたえる。

教師は、上記の実施の有無をチェックし、発表者のモチベーションが上がるようなコメントをする。

発表原稿：内容、文法ともにチェックはしない。

### (2) 第2段階のトピック発表

目的：発表者（複数）はクラスメートが興味を持つであろうトピックを選び、準備して発表すること。

発表時は伝わるように話し方を変え、臨機応変に質疑に対応すること。

実施頻度：週1回

所要時間：180分

実施要領：発表者の人数に合わせてグループを作り（発表者が4人なら、4グループ）、発表者はローテーションで各グループを回り同じ内容で発表を繰り返す。各グループ同時進行する。

準備段階の指示：事実と意見を分け、箇条書きにして、分かりやすく伝えること。

ローテーション発表：発表1分、質疑応答10分×グループ数

聞き手は発表内容について各自まとめた後、グループで意見交換する。

フィードバックの目的で各グループ代表が発表の要旨を言い、発表者の意図と一致しているか確認する。

発表者は質問されたことをまとめる。フィードバックを受けて、再度発表する。教師はファシリテーターとして見守り、場を盛り上げ、クラス全体にフィードバックする。

発表原稿：運用力重視のため、内容、文法ともにチェックはしない。

## 3. 結果

実施期間：第1段階 1か月、第2段階 2か月

事前準備時間：調べる・まとめる・練習する、あわせて2～3時間半

効果：発表者は、第2段階でローテーションして発表を繰り返すうちに、自ら発

表内容をわかりやすく伝えられるように変化させていた。

聞き手はクラスメートの発表を複数回聞くうちに聴解力が伸び、質疑等の産出速度が速くなり、企業面接での想定外の質問にも対応できる力がついた。

考察：就職1年後に振り返りアンケートを実施した結果、就職準備に効果的な教授法であったと言える。

例) 上司やチームの皆さんと相談するとき、自信をもって話すことができる。相手に質問されたとき、自分がどう答えるべきか客観的に考え伝えられる。

## 【所感】

発表能力向上のためのトピック発表はよく使われる手法であるが、筆者が実施してきたのは第1段階のみで、今回ローテーションでのグループ発表という新しい手法に出会い、現在のクラスでどのように実施できるが考えを巡らせてみた。

以前からトピック発表はいろいろなクラスで行ってきたが、やり方の方針をはっきり示していなかったため、結局グダグダになり無駄な時間を過ごしたようで自然消滅することも少なくなかった。今回の発表で、「言葉の運用力を重視するため原稿のチェックはしない」という方針を聞いて、トピック発表の意図とやり方のスタイルをしっかりと確認させてから行うことが大切だと感じた。

手法として共感できる点は、聞き手を意識したトピックの選び方、ローテーション発表で自ら発表原稿を改善していく点、発表者、聞き手ともに次回へのモチベーションを重視したフィードバックをする点である。

疑問点としては、対象が企業内定者であったこと、原稿内容・文法のチェックを行わないことである。今回の発表諸氏が提示した体系表では第2段階後に内定獲得、とあったが、実施要領を見る限り、内定獲得後に第2段階を行っている様子である。入社後をイメージして言葉と態度の運用力を身につける、というのは大きなモチベーションになりうるのだろうか。原稿のチェックを行わないことについては、「伝わるように自分で工夫する」という力を養うためではないかと思うようになった。教師の原稿チェックが入ると思うと、書き方も甘くなる。添削してもらった原稿は自分の言葉ではないので、身になっていないことが多く見られ、聞く側も聞き取れないことが散見された。自分が責任をもって発表する、聞く側は真剣に聞いて内容を再現する、という過程を経るうちに、修正能力もついてくるのだろう。

企業面接に際しては、自己分析を行った後にできる限りの想定質問事項を準備し、発音、態度ともに完璧を目指す練習を繰り返してきた。面接までの限られた時間にインプットし、それを産出する力をどのように身につけさせるか、今回の知見から得るものは大きいと感じている。

## ポストセッション

### 「日本語教育 e-learning 展示会」及び「日本語教育教材展示会」についての報告書

山西麻理 (TIJ)

出展数：17

出展内容：eラーニング・授業配信、教材・教育コンテンツ、ICT 機器・学校業務支援、書籍、出展者によるプレゼン

#### 【eラーニング・授業配信】

##### ◎アテイン株式会社

オンライン日本語学習の案内

JLPT 対策、漢字の勉強などを目的とした eラーニング教材

入門コース～N2 コースまでわかれている (N1 は現在作成中)

対応言語が英語、中国語、韓国語、ベトナム語の 4 か国語

料金は一人につき 950 円程度、何回でも使用可能

#### 【教材・教育コンテンツ】

##### ◎新宿日本語学校

日本語学習用アプリ (今回は漢字のみ)

漢字の意味、成り立ち、書き順の確認、書き取り練習、単語など調べられる

辞書のように単語を検索 (テ形からの検索も可能) する機能や単語帳の機能もある

漢字の練習は見ながら練習することも、音を聞いて練習することもできる

新宿日本語学校で扱っている「ひらがなカタカナ練習帳」にこのアプリがついて

5000 円

##### ◎篠崎大司 (別府大学)

日本語教育検定試験の対策教材

日本語教師のための授業に関するセミナーについて

(少人数でセミナーを行ってくれる。少人数制のため日本語教師の悩みに丁寧に答えてくれる)

#### 【ICT 機器・学校業務支援】

##### ◎株式会社 One Terrace

留学生専用申請・学校管理システム『WSDB』

クラウド型日本語学校専用学生管理システム (主に申請管理と出席管理)

作成者が日本語学校で事務、教務の経験があるため日本語学校の視点でシステムが作られている

IC カードを使ってタイムレコーダーで出欠を管理することについても質問した

⇒他校で導入した事例：カード認証や指紋認証は想定外の問題 (代理出席や行列が



できてしまい遅刻するなど) が起きた

## 【書籍】

### ◎株式会社アスク出版

日本語の多読授業のやり方の説明

ICT とはあまり関係ないが、多読をすることで読むスピードが上がる

⇒読解問題が最後まで読めるようになるので、点数が上がる

教師は学生に直接的な指導はしない。代わりに学生の行動を丁寧に観察し、記録をつける必要がある

### ◎公益財団法人 日本語漢字能力検定協会

BJT ビジネス日本語能力テスト CBT 方式導入について説明

受験は PC でやるが、指定された場所でしか受けられない

対象者受験は JLPT N2 相当の学生が好ましい

結果はスコアとスコアに応じた 6 段階のレベルのみ (現在、細かい能力までは判別できない)

## 感想

8 日の分科会 (「デジタル時代の教師の学習支援のあり方」) でも思ったが、すでに ICT を取り入れた授業、学校運営を行っている学校が少しずつ増えてきているように感じた。しかしそれは 100% デジタル化した授業を目指すのではなく、SNS やアプリなどだれでも使える簡単なツールを使った授業であるため、学生が興味を持つように教師側がうまく工夫をする必要があると感じた。

ICT を使った授業を始めるようになって、それほど時間がたっていないが、分析が少しずつ行われ、少しではあるが結果も見えつつある。今回のポストセッションでも成果や失敗談など聞くことができた。来年にはもっと多くの利点、欠点が見え、よりよい ICT の授業が発案されるだろうと思う。そのために私個人も ICT を使って授業を行い、分析を行い、ICT を使った授業を多くの先生方に提案していけたらいいと思う。

## 「はじめよう日本語初級」の勉強会

### 勉強会レポート 1

山田美穂 (TIJ)

最初にこの勉強会の内容を知った時、まさに今の私に必要な勉強会だ！と嬉しく思いました。というのも、TIJ で日本語を教え始めてから、毎回思い通りの授業ができず落ち込んでばかりいたので、この勉強会で何かヒントをつかめれば、と思ったからです。勉強会で学んだことはたくさんありましたが、今回は私がこの勉強会で気付かされたことを二つ述べたいと思います。

まず一つ目は、『テキストにとらわれすぎない』ということです。私はテキストの内

容を忠実に教えることが重要だと思っていました。でも、今の時代に合わない語彙はあえて紹介せず、時代に合った語彙、状況設定を新たに取り入れても構わないということを知りました。使える日本語を目指しているのだから当然と言えば当然のことなのですが、新人ということもあり、軌道から逸れてはいけないと思い込んでいました。今後はテキストの内容は順守しつつ、臨機応変に内容を変え、使える日本語を教えたいと思います。

二つ目は、『言葉で説明しようとせず、良い例文・状況設定で理解させる』ということです。私はどちらかということ言葉で説明して理解させようとする悪い癖があり、良い例文を思いつくのがとても苦手です。「まずはテキストを離れ、自分だったらどんな時にこの文を使うのかを考えてみると、自ずとヒントが得られる」というアドバイスをいただいて、まさしくその通りだと納得いたしました。いかに良い例文をたくさん作れるか、が今後の私の課題です。

最後に、今回このような勉強会を企画していただき、ありがとうございました。また、貴重なご意見・アドバイスをしてくださった先生方、本当にありがとうございました。とても参考になったので、できれば違うグループの先生方のご意見もお聞きしたかったです。この勉強会で学んだことを来学期の授業に生かせるよう頑張りたいと思います。そして、またこのような勉強会を企画していただけたら、ぜひ参加させていただきたいです。

## **勉強会レポート2**

田中久美 (TIJ)

今回、初めて TIJ のオリジナル教科書「はじめよう日本語初級」の勉強会に参加させていただいた。今回の勉強会は、私を含め新人の教師が、自分で実際に教案を立てて授業を行ってみて、難しかった点や質問したいことを事前に挙げさせていただき、それをもとに話し合いが行われた。

まず、今回の勉強会に参加し、私が今一番強く感じていることは、『目の前にいる学習者を大切にできる教師になりたい』ということだ。新人教師として、教案を立てて実際の授業を行う中で、疑問や不安があると、どうしても「正解」を知りたくなってしまっただけだが、今回、先生方のお話を伺い、「正解」があるわけではなく、まずは、自分がその学期に担当するクラスのレベルなどを把握し、目の前の学習者に合わせ臨機応変に対処していくことが重要であると再認識することができた。例えば、「自分の言葉で話せるようになること」が、会話練習をする最終的な目標で、クラス全体のレベルの高い場合、会話文を丸暗記させるような練習を行う必要はない、などというように、目の前の学習者に合わせて練習内容をアレンジしたり、例文を用意したり、何の練習にどれだけの時間を割くかを考えたりするなど、創意工夫することが大切なのだということを改めて感じた。

また、「テキストの各セクションごとに載っている語彙は、すべて授業で扱う必要があるのか」という疑問を持っていたのだが、テキストに載っている語彙以外に、もっと学習者が言いたい言葉があるのならそちらを優先して扱っていい、というお話も

伺った。それを受けて、改めて今学期の自分の授業を振り返ってみたのだが、その日の授業でやらなくてはいけないことや、教科書に載っていることなどに気をとられ、「学習者自身が発する言葉」をあまり大切に扱ってこなかったのではないかと考えさせられた。

以上のことから、『目の前にいる学習者を大切にする』という気持ちを常に持ち続けて経験を積んでいけば、正しいかどうかは別にして、その瞬間に必要なことなどを教師として自然に自分で判断できるようになるのかもしれないと感じている。今回の勉強会は、経験を積まれた先生方のお話を伺うことができ、また、私自身の目標も以前より明確なものとなり、大変貴重な機会となった。

### 勉強会レポート3

増田寿枝 (TIJ)

今回私が挙げた疑問点はいくつかあったのですが、その中でも特に参考になったのが、10課-2「～を持ってきましょうか(お持ちしましょうか)の引き出し方」でした。この課以外にも学生に自発的に言わせるような文型は、どのように導入したらいいかが毎回難しいと思っていたのですが、今回色々な先生方のアドバイスを聞いて、以下の流れで行うとスムーズだとわかりました。

- ①事前に学生にその場面を推測させるような状況を設定する(レアリアなどを用意する)
- ②教師側から文型を出す(学生に無理やり出させようとしない)
- ③同じ設定で今度は学生側に言わせて練習

必ずしも導入で学生から引き出す必要はないのだとわかりました。ただ、この文型にどんな意味があるのかを掴んでもらわなければいけないので状況設定やこちら側がどんな気持ちでいるかを学生にきちんと理解させる必要があると思いました。

今回私が挙げた疑問点以外にもとても参考になったのが、5課-3「形容詞を2つつなぐ組み合わせについて」です。並列と理由・結果の組み合わせが出てくるので、その違いも理解させなければならないのがとても難しい課だと感じました。

「東京はすみやすくて便利な町です。」(?)

「東京は便利ですみやすい町です。」(o)

なぜ上の文は違和感があるのかを学生に説明し(原因-結果の関係ではないから)、さらに並列の文もあることを説明すると混乱する学生もいるのではないかと思います。広瀬先生がおっしゃっていた以下の並べ方が、とても分かりやすく学生も理解しやすいと思いました。

- ①数量的なイ形容詞
  - ②ナ形容詞
  - ③感情的なイ形容詞
- (大きい/高いなど) (便利/静かなど) (おもしろい/楽しい/良いなど)

※①+②/②+③ の組み合わせを作らせる

この組み合わせにあてはめて練習すれば間違いも防げて余計な混乱もしないと思います。また、自分自身、普段無意識で言葉をつかっているのです。このような仕組みで文が

成り立っていたことに初めて気が付きました。

他にも、今回いろいろな先生方のやり方を聞くことができ、また自分では気づかなかった疑問点もほかの新任の先生方の質問事項を読んで気づく点が多くあり、とても勉強になりました。

#### 勉強会レポート4

天野伸子 (TIJ)

「はじめよう」のテキストは、練習1, 2, 3の例文の数は少ないが、ここに多くの学習すべきことが詰まっていると思う。例えば、3課S4の例文に、「だれが来ますか」とある。ここに誰が来ますかではなく、今友だちと自分が話している場所ではないところへ行くのに、「だれが来ますか」と質問するのを説明することを私はむずかしいと感じた。それに対して、今回の勉強会で先輩の先生方から、「だれが来ますか」という質問は、自分は今ここではなく、そこにいるという視点から、出てくる質問であることを教えていただき、とてもよく納得できた。また、それを説明するイラストなども教えていただき、先生方それぞれに工夫して授業をしていることがよく分かった。

また5課の二つの形容詞をつなげる練習では、い形容詞が「くて」、な形容詞が「で」になるという文法を教えることよりも、そのつなぎ方に **reason→result** という順番の規則性があり、それを教えることのほうがむずかしいことを学んだ。

11課S3の「世界で一番小さい国はどこでしょうか」の答えの「～でしょう」「だと思います」「だろうと思います」「じゃありませんか」「ですか」については、そう思っている確信の度合いが違うことを説明するのはむずかしいと感じたが、おおよその%を表示する方法のほか、「〇〇先生の年齢は～才だと思います」「〇〇先生のお父さんの年齢は～才だろうと思います」などの例文を教えていただき、非常にわかりやすいと思った。しかし、自分ではこのような例文がなかなか作れないのが現状である。

日常生活では電話をかけるシチュエーションは少なくなったが、学校やアルバイト先への連絡など非常に大切な会話である。しかし、テキストの素材が、時代の流れとともに古くなっているところは、新しい素材を自分で工夫することが必要だと思った。

そのほか、例えば「会話」「応用」は、完全に覚えるまで言わせるのかどうか、会話より応用に時間をかけてしっかり話すのか、など先生によりいろいろ工夫されていることがよく分かった。

先輩の先生方の授業のお話を聴くことができ、有意義な勉強会だった。ありがとうございました。

## 日本語教育実習体験コース研修レポート

千田光弥

ある時、人のためになる仕事をしたいと思った。日本語教師という仕事があることを知り、それを目指し独学で勉強し、2016年12月に検定試験に合格した。教育実習をしなればと思いつつもグズグズしてしまい、2018年6月になってしまった。現在仕事をしているため週1回しか学校には通えない。そんな時T I Jを知り相談に伺った。阿字地先生と面接をし、中上級中心の実習スケジュールを組んでいただいた。

授業見学は1回のみ金子先生担当の初級2Aの会話、ドリル、聴解の授業を見学した。ちゃんと起立してから挨拶し、出欠を取っていた。会話の授業ではテキストの文字情報はあまり使わず、ホワイトボード、絵カードなどを使って、先生と学生とのやりとりが中心であった。学習項目の内容を説明や質問しながら理解させていき、表現を練習する。学生ペアでの会話練習では、話したいことをイメージさせ、自分の経験や自分が使える語彙で会話をさせる、そんな意図が感じられた。

休憩時間に2Aクラスの担任の先生がいらっしゃった。何日か前に実施したテストを学生に返却し、平均点が低かったので、「もっとできる！」というような檄を飛ばされていた。

学生は総じてまじめで熱心であるという印象を受けた。先生方は日頃から授業やテストなどで愛情を持って厳しく指導なさっているのではないだろうか。日本語を教えることは必然的に日本文化を教えることにもなる。日本的な挨拶や規律を守ることなど、時には必要なことかもしれないと感じた。

中上級2の文法と聴解・会話の授業は各6回あり、阿字地先生の授業を見学した。文法のテキストはN1レベルの内容で、聴解・会話のテキストはビジネス会話である。学生はみんな社会人である。

文法の授業手順は、自分の経験や身近な話題を例に学習項目を導入する。導入部分で学生に興味を持たせ、モチベーションを上げる。次にテキストの例文の語句や内容について質問や説明をすることで理解を促す。やってみよう！（テキストの2択問題）では理解の確認をする。最後に学習項目を使って作文をさせる。これは作文をさせることで再度理解を促し、理解の定着を確認することである。以上のことを授業見学を通して学習させていただいた。

聴解・会話の授業は活気があった。まず、最近話題のニュースを取り上げてヒヤリングをする。学生が聴き取った語句や表現を先生が板書していく。それを2回程度繰り返す。板書した語句を先生と学生が文章につなげていき、ニュースの大意をとる。テキストの談話練習ではビジネスや家庭でのシーンを学生のペアで会話練習をする。次にテキストの例文の表現を引用しながら、自分の場面での会話を学生から引き出し先生が板書する。でき上がった文章を学生がペアで会話練習をする。板書した文章を先生が徐々に消していく。それで会話練習をする。それを繰り返す。最後には半分ぐらいしか文字が残っていなかったが、それでも会話希望者が出るほど、日本語を話したいという気持ちが伝わってくる授業だった。

何とか中上級2の文法の教案を書いてみた。教案作成は大変だった。私はエピソード記憶が重要なものの一つだと考えている。そのため身近なもの、実生活に関係のあるもの、学生の関心のあるものなど、より具体的にイメージできるものを課題とし、エピソード記憶に残るような内容にしたいと思った。

実習は2回実施した。2回目の方が緊張してしまった。理由は学習項目導入の例文に不安があったのだ。模擬実習の時にうまくいかず、持ち帰り検討し、具体的にわかりやすい例を考えたつもりだった。阿字地先生からの指摘は導入部分が多過ぎた、レベル的に難し過ぎた、というものだった。結果、不安や自信のなさが原因で、実習時間の4分の1、学生とのコンタクトが足りなかった。学生の方を見ないので話がつながらない、アイコンタクトが欠けていた。

説明すべきポイントの違いにも気づかされた。「雪深い里」という例文があった。私は「里」の意味を説明したが、学生は「雪深い」の意味の方がわからなかったのだ。学生の側に立った配慮が必要なのだ。

また、他の例文で、芸能人の記者会見という設定と思われるものがあった。記者の質問として「俳優の松坂さんとの結婚はどうなっているんですか。」私はこの場合の「結婚」は「結婚の噂」と解釈したが、学生は「結婚生活」と解釈したようである。このように学生との認識にも違いがあることがわかった。

話し方として、強弱、声のトーン、強調すべきところ、文末まできっちりごまかさず発音することが大切なことであること、テンポや時間配分に留意すること、学生から発言を引き出すことが大切で、それには辛抱強く待つこと、など阿字地先生から色々な助言をいただいた。正に私にとってはテキストになり得る内容である。

上述した通り教えることに関して課題は多い。しかしながら、教壇に立ち、中上級文法の授業を経験したことは非常に有意義だった。やっとスタートしたというのが正直な感想である。今後は初級も含めた教授技術と経験がもっともっと必要だと思っている。

最後に、阿字地先生はじめ、御指導、御協力していただいたT I Jの方々、授業におつきあいしていただいた学生みなさんに感謝申し上げます。有難うございました。

## 教育実習修了レポート

新田夏生（獨協大学）

私が大学で日本語教員養成課程を修得しようと思ったのは、「外国語としての日本語」を学びたいと考えたことがきっかけです。これまで母語として当たり前に出てきた日本語という言葉は、一体どのような姿・形・構造をしているのか、一步引いたところから勉強してみたいと思いました。同時に、私自身これまでいくつかの外国語を学習し、話せることが増えていく喜びはもちろん、伸び悩み挫折しそうになる苦しみも幾度となく味わいました。外国語母語話者に日本語を教授するという行為において、この「学習者としての視点」が活かせるような授業を行いたいと、実習に臨みました。

実習中は初級から中上級まで、様々なレベルの授業を見学させていただきました。初

日のイントロダクションで「学習者の『日本語で話したい気持ち』を引き出すような『場面・状況』を教室内で模擬的に作りだし、それに応える文型を提示する」という TIJ さんの教育方針を伺い、非常に共感しました。これまで自分が受けてきた外国語教育を振り返ってみたとき、ただ文法項目を講義的に説明しただけのものより、具体的な場面を想定した授業の方が、より印象に残り、より身に付くと実感しているためです。TIJ さんでは、どの先生方もこの方針を念頭に置いたコミュニカティブな授業活動を行っており、「みなさんの国ではどうですか?」「みなさんはどう思いますか?」という生徒自身の発話をととても大切にしていると感じました。また、例えば自ら進んで発言する生徒にはやや発展的な口頭練習で指名してみたり、なかなか口がまわらない生徒にはリピートの際に一人で発音させてみたりといった、「対クラス」ではなく「対生徒」を意識した授業運営は非常に勉強になりました。生徒の個性や習熟度を一人一人把握し、授業中も常に気を配る「臨機応変さ」が教師側には求められるのだと学びました。

教壇実習では、実際に生徒の前に立つということで緊張もしましたが、教案作成から模擬実習、フィードバックまで、担当の先生が丁寧にご指導くださいました。独自の教科書を採用しているため授業もそれに沿って行われますが、導入で自分自身のことを話してみたらどうか、補助教材として自作の絵カードを作るのも良いかもしれないと、「私らしい」授業を尊重し、様々な提案をしていただきました。授業中は教案通りに進めることが精一杯で、なかなか理想の授業とはいきませんでした。意欲的な生徒の皆さんのおかげで最後まで楽しく授業を行うことが出来ました。授業見学と教壇実習を経て、今まで授業とは知識を「与える」「教える」ものだと考えていましたが、実際はそのような一方的なものではなく、生徒と様々な考え、習慣、あるいは文化を共有する相互的なものなのだと実感しました。

最後となりましたが、実習を受け入れてくださった広瀬万里子校長先生、教案作成をはじめ丁寧にご指導くださった佐々木真佐子先生、お声がけくださった先生方、そして暖かく迎えてくださった生徒の皆さまに、心より御礼申し上げます。未熟ゆえに至らない点も多く、何かとご迷惑をおかけしてしまったことと思いますが、この2週間は、私がこれまで大学の教室で学んだ3年間だけでは決して得ることが出来なかったであろう発見と驚きに満ちていました。来春からは、社会人として日本語教育からはやや離れた環境に身を置く予定ではありますが、近い将来、日本語教育に携わる道に進みたいと強く考えるきっかけとなりました。本当にありがとうございました。